



こころをあわせて

佐藤 寛子

二学期の始業式、園長先生はこどもたちに「力をあわせること」と「こころをあわせること」のお話をされた。運動会、遠足、おもちゃき……と行事が盛り沢山の二学期である。みんなで力をあわせ、心をあわせて過ごすことの大切さを感じ、私もお部屋に戻ってもう一度こど

もたちに伝えた。けれど、いまひとつ伝わったという実感が待てない。よくよく考えてみると分からないのだ。「こころをあわせる」ってどういうことなのか? 「こころ」って何だろう?

四月、林の組のこどもたちと初めて出会っ



た。三歳からの持ち上がりの十九人と、新しく入園してきた十六人の総勢三十五人のこどもたちである。受け持つことになった私も今年度からである。それぞれ、大切な時間を過ごしてきた。ここでの出会いが、今までの時間につながり、未来へと拡がっていけるようにと願い、一学期を過ごしてきた。

二学期を迎え、幼稚園の場に慣れ、周りの様子も見えてきて、こどもたちは実に良く遊ぶ。砂場、園庭はもちろん、一学期はあまり行かなかった遊戯室、コート室も自分たちの場になってきた。長いお休みの間の体験や幼稚園でのいろいろな行事、クラスを越え年齢を越えた様々な人との関わりを通して、遊びも人との関係もずいぶんと拡がってきたことを思う。

それと同時に、もめごとやぶつかり合いがい

ろんなところで頻繁に起こるようになってきた。どれも、小さな気持ちの食い違いや表現の拙さからくるものなのであるが、そこで交わされる言葉のやりとりに、傷ついたり傷つけられたりして、周りにいる人みんなが何となく嫌な気持ちになる。毎日のように繰り返されるもめごとにつきあいながら考える。私は彼らに何を伝えたら良いのだろうか？

*

ある日のこと、園庭の太鼓橋の下にござが敷かれ、普段はあまり一緒にいない三人組（Y、K、D）が並んで座っている。どうしたのだろうと思う、近づくと、一人は涙のあとがほっぺにうっすら残っている。

Y「ぼくが、お砂場で入れてって言ったたら、T



くんがダメって言って、ぶづぞって言ったんだ」

K「それでね、Yちゃんが泣いててね、かわいそうだから、ここにおいでって入れてあげたんだよね」

D「うん」

私「そう、それは良かった。でもYちゃん悲しくなっちゃったわね。Tくんどうしてそんな言い方したのかなあ」

私は砂場で遊んでいるTを見ながら、彼が今朝珍しく私に抱きついてきて、こっそり、「昨日、デイズニーランドに行ってきた十一時に寝たから疲れてるんだ」と言っていたことを思い出した。

Y「Tくんてさ、自分では言うくせに、誰かに言われるとすぐ泣いちゃうんだよね」

K「そうだね」

私「そうなんだ。どうして

かなあ」

少し考えてから、

Y「きつと、ところがよわ

いんだよ」

私「そうね、誰でもこころが少し弱くなっちゃうことつてあるよね。そういうときは、みんなで助けてあげようね。Yくんも、KくんやDくんに助けてもらったものね」

そんなやりとりの後、お片付けの時間になり、私は砂場でTたちと一緒に道具を片付け始めた。お隣のクラスのM先生も応援に駆け付けてくれて、

「さあ、ここをあわせて片付けよう」

と声をかけてくださる。その様子を見ていたY





が太鼓橋のところから走ってきて、たらいの水で道具を洗っているTの横に同じようにしゃがんで道具を洗い始めた。黙々と洗い続けながら、

Y「Tくん、さつきはごめんね」

T「ほくも、ごめんね」

M先生の声が聞こえる。

「わあ、なんかいいなあ。いい感じ」

——こころって何だろう？ こころをあわせることってどういうことだろう？——

*

「さとうせんせい、ボール遊びしょ」

Nは最近大人を相手に遊ぶことが多い。何人かの人が集まって遊んでいる場に入って行くことにひどく慎重な彼は、「入れて」と言っ

「だめよ」と返されることが多い。彼の慎重さが余計に周りの人たちの気持ちを揺さぶるのだろう。どうしたらいいのだろうと思いがら、しばらく二人でボール投げをしていると、年長組のRくんとE先生の姿が見える。Rくんは、Nと同じサッカーボールを持っている。Nは以前、Rくとサッカーをしたことがあった。E先生がRくんに声をかけてくださる。私もNに声をかけた。

Rくんのパスはとっても優しかった。Nが取りやすいように考えて和らかいボールを送る。受け取ったNも優しく蹴り返す。二人のやりとりは見えていてもこころが安らぐような時間であった。そこへ、Yが加わった。林の組からRくとNのサッカーの様子を見ていた彼は、「ほく、ドリブルもできるんだよ」



と自信满满である。RくんもNも気持ち良くYを入れるが、今までの優しいリズムを知らないYの蹴るボールは強すぎる。

「Yちゃん、もう少し優しく蹴って」

と、E先生も私も声をかけるが、間もなくNがスーッとその場からはずれ、また私に、

「せんせい、ボール遊びしよ」

と言ってきた。諦めずにその場を持ちこたえてほしいという願いから、

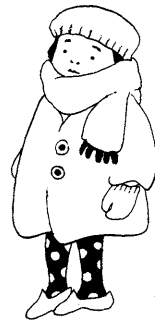
「Yちゃん、Nくんにパス！」

と言って、私はNの背中をpushした。

——こころって何だろう？　こころをあわせるってどういうことだろう？——

*

毎日のこどもたちとの生活の中で、私が意識



することで見えてくることはたくさんある。こどもたちはきつと感覚的に知っているのだから。ひとりひとりの中にとっかかりと「こころ」があるということ。そして、こどもたちは遊びの中で、自分とは違う相手とぶつかったり、認めたり、寄り添い合ったりを繰り返している。「わたし」のこころと「あなた」のこころは違うのだ。こころをあわせるということとは、同じになることではなくて、それぞれの違いを尊重しながら、同じ時間や場所を共有することなのだろ。

保育者として私がすることは、みんなを同じ



ひとつにすることではなくて、違っていいということを伝えながら、時にはその場に踏み止まる勇気が持てるよう、時には相手のところに寄り添えるよう、同じ時間をともに過ごすことであるのかもしれない。そして、もうひとつ、保育者同志の、おとな同志のこころの在り方を意識することも必要であろう。

*

園庭でクラスの子どもたちとリレーをしていた。そこへ、全体の子どもたちをみて下さっているT先生と年長組の子どもたちが何人かやってきて、

「ブーメランを作りたいので紙をください」と言ってきた。年長組のAくんが何日前に林の組で作っていったのを思い出し、その時に使っ

た少し厚めの紙と、良く飛ぶブーメランの型を手を出しているMくんに渡した。園庭を見ると、T先生がリレーに入ってくださっている。Mくんと、後から加わったSくんのブーメラン作りを手伝った。

*

私の中では、ごく普通の保育の場面であった。私とT先生の連携もうまくいっているように思っていた。ところがである。保育後の話し合いで、Mくんがブーメランを作ることになったのは、Aくんとブーメラン遊びがきっかけであったということが分かった。普段友達と関わるのが少ないAくんを思い、T先生はAくんと一緒にMくんがブーメランを作ったら……と考えていたようである。けれど、私にはAく



んがそこにいた記憶がない。T先生の思いも全く分からなかった。話をしてみても初めて、T先生と私の間の食い違いや、その間に挟まれたAくんを思った。

こういうことは、日常の保育の中ではよくあることなのかもしれない。保育者の思い込みや保育者同志の連絡の行き違いは、きっと思っている以上に多いだろう。そのことに無意識でいられるのは、こどもたちが柔軟に対処してくれているからであろう。

その後、T先生ともう一度あの日の保育を振り返ってみることにした。T先生と私ともう少し場と時間を共有していたらどうであったか。そこで出会うまでの、それぞれの時間の流れや、人との関係をお互いを感じる事ができたはずだ。そして、こどもたちの遊びがもつと

スムーズに流れたであろう。

保育者同志の連携は、ど

この現場でも何らかの形で意識されていることである

と思う。私やT先生がそうであったように、保育後、その日の保育を振り返り、それぞれの保育者がさまざまな情報を交換していくことで新たに覚えてくることはたくさんある。けれど、話し合いが難しいのは、保育者それぞれが決して同じではないことにある。クラスを受け持っていたりいなかったり、非常勤であったり常勤であったり、経験があったりなかったり……顔が違ふように感じ方も考え方も違ふ。話し合いの結果が、それぞれの保育者の保育の評価に





なってしまうと、何のための話し合いかわからなくなるだろう。まずは、違いを尊重する必要がある。つまり、保育者同志もまた、「ここをあわせること」が大切なのだ。連携とは、それぞれの保育者がそれぞれの違いを認め合いながら、ここをあわせて保育の流れを創造していくことなのだと思う。

*

十月も半ばを過ぎ、長くて暑かった今年の夏がやっと終わった。運動会での年長組のリレーは、ひとりひとりが自分らしく走り、次のひとへとつなげていく感動的なものだった。影響を受けた林の組のこどもたちの何人かは、このところ毎日園庭を走り回っている。相変わらず、誰が早いか、誰が一番かで非常にもめてい

るのだが、どこからともなく「よおい、どん！」の聲がかかると、何事もなかったかのように一斉に走り出すのは何とも可笑しい。私は、ひとりひとりを尊重し、彼らと過ごしているこの場と時間を大切にしよう。そして、ともに保育をしている先生方とここをあわせて過ごしていこうと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)